

はくさんさん

伊豆法難七五〇年報行脚の折

太鼓をたたいて

第73号 H22年3月

伊豆市法住寺 発行

千葉県市川市、本山真間山弘法寺の貫首さまご夫妻はじめ、若いお上人方十六名のお詣りがありました。

伊豆法難七五〇年の今年、伊豆の霊跡の地に立ち、日蓮大聖人の魂を直に感じ、報恩感謝の祈りを捧げたいと、伊東佛現寺・川奈蓮慶寺さまへの行脚の折に、当山にもお詣りして下さいました。

わざわざ当山に寄ってくださるという事は、日頃から熱心に信仰を深めていらっしゃる檀信徒の皆さんに会いたいということだと思ひ、皆さんに声



掛けし共にお迎えしたのでした。

*

「アッ！ 聴こえてきた！」、遠くから太鼓の音が聴こえ始めました。寒風の中で待ちわびた檀信徒の皆さん、暫くすると、その目に撃鼓行脚隊の姿が見え始めました。そして地を揺るがす「南無妙法蓮華経」のお題目が近づいてきました。お寺の下の丁路地でお迎え、行脚の若いお上人さん達の声が一段と大きくなり、思わず合掌の手に力が入ります。一緒に太鼓をたたきながらお寺まで行列、山門を入り石段を踏み上がる、もう皆さんのお姿は南無妙法蓮華経そのものでした。

貫首さまご夫妻、若い大勢の山務員、護持会長さんはじめ本堂一杯の檀信徒の皆さんと共に一生懸命の南無妙法蓮華経。その後のお茶の席には、若いお上人さん方

が飛び入りで歓談。「直接、お話をさせてもらって、嬉しかった」と若いご婦人。「若いお上人さんに握手してもらっちゃった！」と、ニコニコ顔で帰るおばあさん。

「待っている時は寒かったけど、もう夢中になった。今日、来ることができて本当に良かった。」そんな声を沢山頂きました。次の朝は珍しく銀世界、「昨日の感激と今朝の美しさ。ジツとしてられなくて」と朝早くから嬉しい電話もありました。

*

そんな皆さんの声を聴いて、魂・仏性が湧き出たんだと思いました。

太鼓をたたきお題目を力の限りお唱えして歩く撃鼓行脚、この古めかしいとすら思える形のお題目が、皆さんの魂の琴線・仏性に触れ、揺り動かされウァーと出てきた、そう思うのです。南無妙法蓮華経の奥深い霊力と肉声の凄さを改めて感じました。

*

直ぐに貫首さまから礼状が届きました。

『行脚でお伺いした時のご接待と、いい、お檀家の皆さまの暖かいおもてなしと、何から何までお心のこもったお心遣いを頂き感激しました。当山の山務員も、お檀家さんと個々にお話できる実地の布教の勉強をさせて頂いた事は、

心に残るものとなっております。

感想文を隨身に書かせましたところ、皆一様に、やはり法住寺様での体験が一番印象深く思い出となったようです。私もこれを読み嬉しく思いました。沢山の事を、またも勉強させて頂きました。法住寺の輝きは本物でした。』

貫首様の奥様からも頂きました。

『大勢の檀信徒の皆さまと一緒に伊豆の地を踏んでお題目を唱えられましたことは、山務員一人ひとりが自分の寺に帰って、あの景色を思い出して布教活動してくることでしよう。』

本山ではなかなか学べない、家族が丸と



寺様以外ありません。大洋君のお経と太鼓が身についていて、嬉しい何よりの光景でした。』

山務員を代表して総務さんの礼状。

『護持会長様

からもご挨拶を賜り、誠に有り難く存じます。

そして私共を出迎えてくださった檀信徒の皆様のお姿を目の当りに致しました際には、この日一番の感激を受け、法要後も懇親の席を設けて頂き、まさに「寺檀和融」の何たるかを大いに学ばせて頂きました。私共一同、今回の研修行脚で受けました感激と感動を、また貴重な経験为己の糧と致しまして、今後の布教伝道に邁進し、より一層の精進を重ねていきたく存じます。』

*

これらの感謝とお褒めの言葉は、檀信徒皆さんへのものであることは、言うまでもありません。これからも焦らず地に足をつけて、一歩一歩、南無妙法蓮華經の道を歩んでまいります。

お寺の庭に花いっぱい

昌子寺庭の山務日誌より

暖つきを葉の越冬といふ

三月に入り、境内の桜の花芽も日に日にふくらんできました。桜の木は秋には葉を落とし、小さな花芽をつけてじっと冬を耐え、春には待ち焦がれている私たちを喜ばせてくれます。最近知ったことなのですが、厳しい冬の低温・寒さがなければ、春になっても花芽は花をひらくことなく、そのままで終わってしまうのだそうです。

地に生える草花も同じく、寒い冬があつて初めて春の温かさを感じ取り芽を出すので聞きます。

*

そう聞いて、ふと、人間を思う。自分に厳しい現実がふりかかってきて、初めて人の心の温かさを知り、自分の中の花の種・仏心に気付き、美しい花を咲かせることができると思う。挫折を味わってこそ、希望が持てるのだと思う。

*

植物と人間、別々の形のものでありながら、実は同じ処に在って、かくも一生懸命生きています。私にとって、どちらも愛おしい存在なのです。

寿量の塔完成、杜づくり進む 入魂式、六月十二日

寿量の塔が完成しました。寿量の杜の中心となる立派な塔です。進入路や駐車スペースを造ったり、看板を立てたり、社会の皆さんに広く呼びかける準備をして、入魂式は六月十二日（土）を予定しています。

寿量の杜は伐採が終り、その片付けを春の境内整備作業で元村①の皆さんがご奉仕して下さいました。私も洋明と出来るだけに山に入り、片付け、石楠花の植栽、倒した丸太からの椅子作り等をしてきましたが、これからも整備は続きます。

五十年、百年後を見据えた寿量の杜づくりです。皆さんと共に創っていききたいと思いま



す。杜にスクツとそびえる大樹のよう大きく夢をもち、自然と共に歩んでまいります。

伊豆法難七五〇年、伊東市万灯行列 白龍会も加わる、参加者募集

今年には伊豆法難七五〇年、全国から伊東の霊跡に参詣があり、日蓮宗や宗務所の行事が計画されています。

まず五月十二日のお逮夜（十一日夜）、万灯行列が伊東の市内を練り歩きます。全国から二十位の万灯講が集まる予定で、当山の白龍会も参加しようと思気込んでいます。別紙の通りの内容で、参加者を募集しますので宜しくお願いします。

翌日、十二日は全国から多くの方々が参集して報恩感謝の大法要を営みます。法住寺檀信徒を代表して護持会長さんはじめ、数名の出席となると思います。

当山でもこの意義ある折に、檀信徒全員参加の団参を行いたいと思っています。今年の秋、来春の予定となりますが、ぜひ皆さんと一緒に日蓮大聖人が法難にあわれ、法華経をご自身の血肉とされた地にお詣りしてまいります。

トピックス

境内整備作業

春の作業は元村①の皆さんで、寿量の杜の伐採後の片付けをして下さいました。

夏（七月）の作業は、西の皆さんにお願いします。

星祭り

今年も星祭りが一月最後の日曜日、三十一日に行われました。洋明上人はじめ三人の修法師の迫力あるご祈祷で、善い運勢をよび、悪運を祓い、今年一年が無難にと祈願しました。多くの厄年払いのほか、各種ご祈願が沢山ありました。

中伊豆立正会大題目講

伝統の大題目が三月七日、当山でありました。蓮華の会が加わった十二日講も、立正会の皆さんとお題目。殊に若い方々が増えた和讃は輝いていました。

伊豆連合大題目講

伊豆連合大題目講の理事に、当山から山下要さんが就いて頂きました。田方一円檀信徒の繋がりを広め深めていくお講です。皆さんのご協力を宜しくお願い致します。

救援募金

本堂の募金箱の合計が一〇、四九〇円ありました。何時も、ありがとうございます。

宗務所の社教会に納めました。去年は伊豆管区全体で約八十万円集まり、地元の福祉協議会や日蓮宗を通してハイチやチリ地震等の国際義援金として使われています。

本堂の二つの募金箱に、時々心配りして下さい。

＊これからの主な年間行事

三月二十一日 春季彼岸法要
五月 十一日 伊豆法難550、伊東万灯行列
六月 十二日 寿量の塔、入魂式
八月 三日 お盆の施餓鬼会
八月七、八日 寺子屋道場
九月二十三日 秋季彼岸会
九月二十七日 伊豆連合大題目(宗徳寺)
十月三十一日 お会式

御志納金 「十二月〜二月」

七十万円	函南町	塩田研士殿	尊祖母七七忌砌
三十万円	小川	室野和義殿	尊父七七忌砌
二十万円	元村	飯田安久殿	尊父七七忌砌
十万円	元村	伊東幸二殿	尊父葬儀の砌
十万円	狛江市	小塚敦子殿	尊母葬儀砌
十万円	清水	山下秀治殿	尊祖母二十七忌砌
五万円	元村	伊東一衛殿	尊父三十七忌砌
五万円	元村	三田五月殿	夫君七回忌砌



洋明さんのおはなし

この春娘の采海(あやみ)が、仏天と皆様のおかげで一年生になります。ついこの間まで赤ちゃんだった気がするの、時が経つのは早いものです。

日常よく口にする言葉「ありがとう」「ごめんなさい」。感謝の気持ちをこめた「ありがとう」はよく口にします。「ごめんなさい」も社会の中や友人には言えても、意外に家族や身近な者には非を認めたくない強情な気持ちや、羞恥心が邪魔をして素直に口に出れないものです。ですがその「ごめんなさい」の一言が有ると事は意外に収まるものです。「ごめんなさい」が言えることはとても大切なことです。

＊

先日、妻が植え込みで車に傷を付けて来ました。車好きの私は、駐車場に一目散に走り、その傷を見て妻に有無も言わず「何をやってるんだ!」。

妻は、「あなたが、傷つけたときは何も言わないくせに!」。

その場はまさに地獄や修羅の世界。しばらく言い合いました。

僧侶という立場にありながら、反省の言動でした。「ごめんなさい」。

後々、妻に「有無も言わず、いきな

り強い言い方をして「ごめん」と謝ると、「私も、最初に謝らなくてごめんね。大事な車なのにね。でもいきなり強く言われたからカーツとなって」。

そう言われると、自分の器の小ささを更に反省をします。

確かに自分に非がありながら、その非を認めたくないために、妻に謝らなかつたことが何度かありました。なかなか身近な人に素直に謝るのは簡単でいて、難しいのかもしれない。

＊

寿量品第十六の「質直意柔軟」、こころ素直に柔らかくそして正しく真直ぐにと言う意味です。

あの時ちゃんと謝っておけば、「ごめんなさい」が素直に言えたら、こういう思いは誰にでもあると思います。

非があつたら反省し「ごめんなさい」と言える、素直な柔らかいところを持ちたいものです。人にその思いを伝えることは、相手を大切に思うこと、仏様のこころにも繋がります。身近な人には、なおさらです。

＊

人に感謝の気持ちを伝える「ありがとう」、素直な気持ちで謝れる「ごめんなさい」。振り返ってみて、自分もそうだなと感じる方は、身近な人にだからこそ、こころ素直に柔らかな気持ち伝えてみてください。その言葉には仏様のこころが宿っています。